

『随想録』より抜粋

25 万歳ばんざい

なむあみだぶつ

ばんざいばんざいばんざい てんじようてんげ

おお

こうふく

もうねん

南無阿弥陀仏 く 万歳万歳万々歳、天上天下にこんな大きな幸福があるだろうか。妄念

乱動らんどうするこの渦巻うずまきの儘ままが如来によらいの一人子ひとりことは感謝かんしゃせずにはおられないではないか。煩惱熾盛ぼんのうしじょうの

この儘ままが、正定不退しょうじょうふたいの真菩薩しんぼさつとは懺悔さんげせずにはおられないではないか。法の尊ほうとうとさを仰あおげば

仰あおぐ程機ほどきの醜みにくさを知しらされ、機きの下劣げれつを掘ほれば掘ほる程ほど、法の深妙じんみょうなるを教おしえられる。御親みおやの

五兆ごちようの願行がんぎようを思おもうにつけても、逆謗ぎやくぼうの屍しかばねの洪太しぶとさを深謝じんしゃし、釈尊しゃくそんの八千遍はっせんべんの御苦勞ごくろうを偲しのぶに

つけても下根下劣げこんげれつの無能むのうを懺悔さんげし、諸仏しよぶつの証誠護念しょうじょうごねんを聞きくにつけても、背恩忘恩はいおんぼうおんの不甲斐ふがい

なきに号泣ごうきゅうせずにはおられない。仏智満入ぶつちまんにゅうの今いまでさえ噴焰怒涛ふんえんどとうの惡魔あくまじゃもの、御親みおやの御胸みむね

を焦がしているではないか。信樂開発の今でさえ我慢我執の盲者じやもの、釈尊の涙の乾く暇がないではないか。正定不退の今でさえ放逸無慚の曲者じやもの、諸仏の苦勞は絶えな
いではないか。この梃子に合わない法龍が、この仕末の悪い法龍が仏智の不思議とはい
がら、地獄遁れただけでも不思議じゃに必定の菩薩とは又不思議ではないか。不思議の中
の又不思議、鬼が仏に成る不思議!!

底の知らない悪魔の法龍が、精神的の大満足を獲て、身命を賭して叫ばずにおれないとは
不思議ではないか。高座に登れば快刀で乱麻を截つが如く、水際鮮やかに真仮の分際が手際
よく口から出て来るのに、自分ながら不思議で堪らない。人に言つて聞かすのではなく、自
分の悪性をさらけ出し、これが救われたからお聞きなさい。この逆謗の屍が開発したからお
求めなさい。開発しないのは熱心が足りないからだ。満足出来ないのは真剣に成っていない
からだ。慶びの出で来ないのは摂取されていないからだ。慶んで来いとは仰らんからと平氣

でいるけれども、真実功德大宝海の仏智が満入していないから慶喜心が湧かないのだ。經典
師釈には、慶んで来いと言う要求はないけれども、開発すれば慶べると書いてある。第十八
願には信樂、成就の文には信心歡喜、付属の文には踊躍歡喜、聖人様は廣大難思の慶心、心
身悅豫と仰せられてあるではないか。現在の地獄を知らないから、大千世界に満てらん火を
も過ぎ行きての奮進がなく、三定死の境地に立たないから、猛火に包まれている事に驚かな
いのだ。八つ裂きに逢うても不足の言えない逆謗闡提の機が、地獄を遁れさして戴いただけ
でも地団太踏んで慶んでも足りないのに、五十二段を超証さして戴く約束が決まって慶べな
い筈がないのだ。慶べないのは話だけ知って開発していないからだ。この世の議員に当選し
てさえも、僅か四年の任期の議員でさえも万歳万歳と有頂天に成っているではないか。無量
寿の証を開かして戴くのに何故万歳と言えないのだ。

でも歎異鈔第九節には「慶ぶべき心をおさえて慶ばせざるは煩惱の所為なり」と仰せられ

てあるではないか。あのお言葉は貴殿とは桁が違う。貴殿は、機を見れば底きび悪い、ひよつと墮ちはせぬかの不安があるから喜びが出ないので信前であり、歎異鈔は開発以後信後の懺悔であるから、往生に対する不安や心配は微塵もなく、湧き出る煩惱を見るにつけても、親の御苦勞を感謝して「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願はかくの如きわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」と讃えておらるるではないか。信前の行者が信後のお言葉の真似だけて、不安の煙幕を張って浄土に暴れ込もうとしたって臨終の関所が許さないぞ。

現生に十種の利益を蒙る法龍は世の中が思いの儘になるのだ。極悪最下の法龍が今日迄無事に生かされている事が不思議なのだ。病人の多い世の中に一度も大病した事がないではないか。衣食住に困る人の世に何一つとして不自由がないではないか。地位も名誉も財産もないか。法龍には過分なのだ。御客僧、御講師、和上様と尊敬さるる資格が何処にあるのだ。この

心、この身の幸福を思う時、仏様の慈愛、祖先の陰徳を感謝せずにはおられないのだ。家族の死亡に逢い、思わぬ事件に遭遇する時、毒蛇悪龍の悪因の開花なりと懺悔せずにはおられないのだ。して見れば善きにつけては感謝し悪しきにつけては懺悔し、不平もなければ怨恨もない、地上に於ける幸福者、思いの儘になる人生を讃えつつ、使命を果たさずにはおられないのだ。

聖人様は「遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」と仰せられてあるが、俗人から選り出された法龍が無上の功德を具足して、本願や行者・行者や本願のこの慶び、握る世話もいらなければ離す世話もいらぬ。天を拝み地を拝み、山川草木、雨露水土悉くが法龍一人を生かす為ではなかったか。着ている法衣は粗末でも、み仏の賜物だから応報の妙服の思いがし、食べている食物は不味くとも、白毫の恩賜と思えば百味の飲食の思いがし、住んでいる住宅は傾いていても脚延べさして戴く儘が宮殿の思いがするのではないか。と大満足させてくだ

さるまでの御苦勞はどれだけであつたろう。この鴻恩に報いる為には今日が最後じゃ、今が最後じゃという総てを投げ出した活動をせずにはおられないのだ。地上の総ての宝を戴いたよりも、これ程の愉快、満足、歓喜、安心、感謝、慶喜があるだろうか。万歳万歳万々歳と

さけ

おや あ

いただ

なむあみだぶつ

叫ばずにはおられないのだ。いい親に逢わして戴いたなあ!! 南無阿弥陀仏 く

26 真似では通れぬ

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。信に信功なく、行に行功なしと言われてあるように、信じた手柄も間に合わず、称えた力も助けに成らず、ありの儘の凡夫の燃え立つ儘が、南無阿弥陀仏と一体とは不思議ではないか。法を見る儘が機、機を見る儘が法、五兆の願行を

成就じょうじゆして十劫じう已来いらい呼び通とおしと聞きく時ときには、如何いかに難化なんけの法龍ほうりゆうかを反省はんせいさされ、釈迦しゃ往来かうらい八千
遍べんの御苦勞ごくろうを聞きくにつけても、惡逆あくぎやくの法龍ほうりゆうの洪太しふふとさを顧かえりみ、十方恒沙じつぽうごうじゃの諸仏しよぶつ如来にょらいの証誠しょうじようご護
念ねんを聞きく度毎たびごとに、難治なんちの業病ごうびようの法龍ほうりゆうを知らさるるのである。法の鏡かうがみに照てらし出だされた逆謗ぎやくほうの
屍しかばねが信樂しんぎ開発かいほつさされたとは、無量むりよう永劫ようごう親様おやさまを泣なかせた事ことだろう。自惚うぬぼれ強い惡性あくしようが真心しんしん徹
到とうさされたとは、幾度いくたび無駄むだ骨折こつねらした事ことだろう。梃子てこでも動かぬ生え抜きはぬの実機じつきが無我むがの
境地きようちに立たたされたとは、どれだけ心血しんけつを注そそがせた事ことだろう。

見みれば見みる程ほど、法の尊とうとさを仰あおぎ、聞きけば聞きく程ほど、惡性あくしようの深ふかさを懺悔さんげせずにはおられない。
歡喜かんぎの言葉ことばも南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、懺悔さんげの言葉ことばも南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、本願ほんがんや行者ぎようじゃ・行者ぎようじゃや本願ほんがん、法龍ほうりゆうの
儘ままが南無阿弥陀仏なむあみだぶつとは不思議ふしぎの中なかの不思議ふしぎではないか。死後しごの体失往生たいしつおうじようも勿論もちろん結構けつこうには違ちがい
ないけれども、現生げんしよう不退ふたいの不体失往生ふたいしつおうじようは猶更尊なおさらとうといではないか。機法きほう一体いつたい、仏凡ぶつぽん一体いつたいの初起しよきの
一念いちねんから三業さんごう二利にりも、五念ごねん四修ししゅうも悉ことごとく南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、乃至ないし一切いっさいの身口意しんくゐの三業さんごうは南無

阿弥陀仏と一体に動かなければならないのだ。然るに悪業の催すは過去の業因の惰力であり、失敗を重ねるは不徳の至りであるけれども、名号の徳には寸毫の変りもないのだ。願力の不思議の鮮やかさに十方法界の功德を全領して、握る世話もいらぬが離す世話もいらぬ、往生に対する心配は微塵もなく報謝の足りない事に呆れるのだ。

た いっしょうがいどりよく いただ おうじよう いちだん ぶつち ふしぎ た す

まだ足りないくで一生涯努力さして戴くのだ。往生の一段は仏智の不思議で足り過ぎてゐるが、報謝の側は何時も不足ばかりだ。こうまでも安らかな尊い信念があるだろうか、御恵み溢るる大慈悲に感泣せずにはおられない。

一切の道俗よ、信仰は真似では通れないぞ。学問では解決はつかないぞ。会読でも間に合わないぞ。無量永劫流転を続けた逆謗の屍が、聞信の一念に心眼を開かして戴いて八万の

法蔵ほうぞうを読み破やぶるのだもの、居眠りいねむ半分はんぶんや仁義参りじんぎまいや、子供こどもの守もりや暇ひまつぶしに参まいった位くらいで何なんの解決かいけつがつくものかい。

真宗しんしゅうの道俗どうぞくは他力たうりきじゃ、唯ただじゃ、その儘ままじゃと調子ちようしに乗のっているけれども、向むこうに眺ながめ
た他力たうりきは槍放やりつばなしぞ。話はなしに聞きいている唯ただは空砲くうほうぞ。合点がってんしたその儘ままは我儘わがままぞ。

他力たうりき他力たうりきと言いっているけれども、自力じりきの判わからない者ものに、他力たうりきの味あじわえる者ものは唯ただの一人ひとりだっ

ていないのだ。自力じりきの修行しゆぎようをしたり、自力じりき廻向えこうをしたりしなかつたら、皆みな自力じりきを興おこしていな

いように心得こころえ、南無阿弥陀仏なむあみだぶつに向むかえば悉ことごとく他力たうりきのように思おもい込こんでいるけれども、信楽開発しんぎようかいほつ

しない間あいだは総すべて自力じりきの執心しゅうしんを離はなれてはいないのだ。永年御法義ながねんごほうぎを聴聞ちようもんしながら、うんともす

んとも言いわない代物しろものが照てらし出だされ、今度聞きいたら判わかるだろう、今度聞きいたら安心あんしんがつくだ

ろう、今度こんど、今度こんどと力りきむ心こころが自力じりきの心こころなのだ。又聖人様またしようにんさまは「定散じようさんの自心じしんに迷まようて金剛こんごうの真しん

信しんに昏くらし」と仰おほせられて、心静こころしずかに殊勝しゆしやうな念仏ねんぶつが出でれば往生おうじやうは一定いちじやうと思おもい、散乱放逸さんらんほういつの時ときの

念仏ねんぶつは功德くどくがないように心得こころえ、功德善根くどくぜんこんの励める時ときの念仏ねんぶつは如何いかにも参れまいそうなが、反目はんもく
激論げきろんの時ときの念仏ねんぶつは行けゆそうにないように思うおものが、自分じぶんの心こころの善よし悪あしで往生おうじょうを決めきかけて
いるのだもの、これが自力じりきでなくて何処どこに自力じりきがおるのだ。その根本こんぽんの自力じりきの機執きしゅうが弥陀みだの
利剣りけんに截たち切きられずにいて、枝葉えだはの成り心なごころや、戴いたきぶりに技巧ぎこうを凝こらし、言葉ことばの綾あやに誤魔化ごまか
され、はいの返事へんじも向むこうから、戴いたいた信しんが誠まことなら往生おうじょうは一定!!いちじょうと言ういて貰もらうと、誠まことでもな
もの まこと な つも なむあみだぶつ きいろ こえ ねんぶつ ちょうし と
んでもない者が誠まことに成なった積りつもで、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ く と黄色い声の念仏ねんぶつで調子を取とって
有難ありがたがつて、他力たうきの信仰しんこうは徹底てっていした積りつもでいるのだもの情けなさけないではないか。

ただ

い

やすが

ただ おつしや

ただ おも

ただ

唯じゃく と言いっているけれども安買やすいして、唯と仰おほるから唯ただと思うおもっているのでも、唯

と書いてあるから唯と知ったのでも往生の間に合わないのだ。唯と言う言葉までも用事のな
い唯の境地に生かされなければ、真宗の極意を諦得さされたとは言えないのだ。人々は上の
空で宗教を聞いているが、あれでよいのか。どうなったのが唯なのか、どう戴いたのが唯か
御承知かい。

正信偈の上には、唯と言う字が六回出ているが、歎異鈔の二節目には「親鸞におきてはただ
念仏して」とあるから、ただ念仏しさえすればよいと言う簡単な唯ではないぞ。前後を讀ん
で御覧なさい。前は「各々十余か国のさかいを越えて身命を顧みず」尋ねて来たのは、内か
らは善鸞大士の異議、外からは日蓮上人の攻撃によって、今まで有難がっていた親株同行が
信仰に狂いを生じて、身命を顧みず尋ねて来たのであるが、今の求道者にこの態度がある
か。その時聖人様は何と御答え遊ばしたか。後の同行を育てて貰う為に任せた親株同行
が、善鸞の言葉でぐらつくのかい、日蓮の批難で狂いを生じたのかい。実地親様に逢うてい

ない証拠しょうこではないか、と言葉ことばには出だされないけれども、涙なみだをのみながら、表面ひょうめんだけは優やさしく、南都北嶺なんとほくれいにも立派りっぱな学者がくしゃがおらるるから、訳わけや理屈りくつが聞ききたいのならさっさとお行ゆきなさい、親鸞しんらんにおきては唯念仏ただねんぶつして、と仰おほせられたのだ。後あとの文句もんくを讀よんで御覽ごらんなさい、「たとい法然上人ほうねんしやうにんにすかされまいらせて地獄じごくに墮おちたりとも更さらに後悔こうかいすべからず候そうろう」「いずれの行ぎようも及および難かたき身みなればとても地獄じごくは一定住家いちじやうすみかぞかし」と、二十カ年ねんの修行しゆぎやうも百夜ひやくやの祈願きがんも総すべてが竭つきた絶対悪ぜったいあくの親鸞しんらんが誓願せいがん不思議ふしぎに攝取せつしゆされて「ただ念仏ねんぶつ」せずにはいられなかったのだと言いう時ときは、八万はうまんにの法蔵ほうざうを讀よみ破やぶらされたときの「ただ」なのだ。それを簡単かんたんに唯ただと仰おほしから、唯ただとは浅あさましい聞きき方かたではないか。

まま

い

まま

まま

せつぎやうき

その儘ままじゃくと言いっているけれども、どの儘ままがその儘ままなのだ。お説教せつぎやうき聞きいているその儘ままか、家庭かていで火ひの車くるまのその儘ままか。どんな心こころで宗教しゆうきやうを聞きいているのだ。ぼんやり聞きいているの

をその儘ままのように思おもつてはいないか。罪つみを造つくりながら、障さわりを抱かかえながらと平氣へいきで言いつてい
るが、そんな者ものは刑務所けいむしょより他ほかに行く処ところはないぞ。そんな我儘わがままでは眞実報土しんじつほうどへは入はいられない
のだ。

眞宗しんしゅうでその儘まま来こいと言いうのは、善導ぜんどう様の御言葉おことばで言いえば、「直ただちに来きたれ」であるけれども、

「西岸上さいがんじょうに人ひとあつて喚よんでいわく汝直なんじただちに来きたれ」ではないのだ。「一いっ心正念しんしやうねんにして直ただちに

来きたれ」であつて、一いっ心正念しんしやうねんをぬきにした直ただちに来きたれではない。その儘まま来こいよ　く　と言い

えば、調子ちやうしには乗のせやすい、乗のり易やすいけれども、極意ごくいを究きめる事ことは出来できない。何故なぜならば「汝なんじ

一いっ心正念しんしやうねんにして直ただちに来きたれ、我能われよく汝なんじを護まもらん、すべて水すい火かの難なんに墮だせん事ことを畏おそれざれ」

の喚声よびこゑは、貪瞋煩惱とんじんぼんのうに狂くるわされて畏おそれている者ものにこそ響ひびく喚声よびこゑであつて、岸上がんじやうに居眠いねむる者ものに

伝つたわる声こゑではない。今いま信しん仰やうを求もとめる人達ひとたちが素直すなおな柄がらじゃと自惚うぬぼれて、居眠いねむり半はん分に、はいの

返事へんじも向むこうから、戴いたいた信しんが誠まことなら、この儘ままながらの往生おうじやうとは……何なんと呑氣のんきな

宗教しゅうきようもあつた者ものだ。そんな者ものこそ真宗しんしゅうに害毒がいどくを流す身中の虫むしではないか。その儘ままとはどの儘か。唯除五逆ゆいじよごぎやく誹謗ひぼう正法しやうぽうと捨てられた機きが十方衆生じつぽうしゆじやうの本當ほんとうの機きで、本當ほんとうに除かれた機きがその儘助またすかるのだ。自分自身じぶんじしんにその機きが照らし出だされなければ、必墮無間ひつだむけんと言うも、下下品げげほんの機きと言うも、無善造惡むぜんぞうあくと言うも、言うばかりで実感じつかんはないのだ。真実除しんじつのぞかれた時ときでなければ自力じりきの機執きしゆうは除のぞかれないのだ。身動みうごきならぬ絶對ぜつたいの惡性あくしやうの助たすからないその儘ままが、五兆ごちやうの願がん行ぎやうを成就じやうじゆせしめた相手あいてなのだから、唯除五逆ゆいじよごぎやくと捨てられた機きが若不生者にやくふしじやうじやの念力ねんりきで、浮うくか沈しずむか、迷まようか悟さとるか、往生おうじやうの得とく不ふが正覺しやうがくの成不じやうふの境目さかいめなのだ。親おやと子こが生いきるか死しぬるか最後の極意さいごごくい、墮おちるより他ほかに道みちがないと往生おうじやうの望のぞみの綱つなの切きれた時ときと、お前まえは墮おちると今いま知しったかい、親おやは五劫思惟ごこうしゆいの踏ふみ出だしから、逆謗ぎやくほうの屍しかばねと見抜みぬいた上うえの願行成就がんぎやうじやうじゆではないか。助たすけるに間違まちがいなしの念力ねんりきの届とどいた時ときが、助たすかるに間違まちがいなしの大決定心だいけつじやうしん、親おやの願行がんぎやうが、子この願行がんぎやうに成なった時ときが、その儘来またこいよの喚声通りよびごえとおの機きにさせて戴いたいたのではないか。

して見^みれば、他^た力^{りき}も、唯^{ただ}も、その儘^{まま}も、言^{こと}葉^ばだ^だけの真^ま似^ねでは通^{とお}れないぞ。